

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32607

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25670925

研究課題名(和文) 臨地実習で学習が停滞する時の学生と教師の認識と指導に関する研究

研究課題名(英文) A study on the perceptions of students and teachers and instructional guidance when student learning has stagnated on clinical nursing practicum.

研究代表者

堀 良子 (HORI, RYOKO)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：70199529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、臨地実習において学習が停滞した学生と、そのような学生に指導困難を感じる教師の認識について調べた。全国の看護師養成機関のアンケート調査と学生6例、教師7例に対するインタビュー調査を行った。

その結果、学生は素直になれない、上手く言葉で表現できない状況にあったが、教師は現れた言動や記録から問題を探る、考える、評価するなどしていた。教師の一生懸命さが、学生を追い詰め逆効果となることや学生の防衛反応、混乱に巻き込まれ見えなくなることなどについて、指導方法を考察することが重要と考えられた。

研究成果の概要(英文)： Aim: This study aims to investigate the perceptions of students whose learning has stagnated on clinical nursing practicum and the perceptions of the teachers who feel they are having difficulty instructing such students. Methods: A questionnaire survey was administered to all nursing schools nationally and interview surveys of six students and seven teachers were conducted.

Results and discussion: Students found it difficult to express themselves honestly and frankly in words, but their teachers searched to identify, think through and evaluate the issues from the student's words and behaviors and other records. It is important to consider methods of instructional guidance to address such issues as the teacher's hard work actually being counterproductive due to the student feeling cornered, or becoming obscured through being caught up in confusion and the self-defensive response of the student.

研究分野：基礎看護学

キーワード：臨地実習指導 学習停滞 指導困難 防衛反応 巻き込まれ

1. 研究開始当初の背景

看護学臨地実習で、学生は学習が停滞し、なかなか前に進めない状況に陥ることがある。そのような場合多くは無口となり反応が鈍く、教師は指導に困難を感じることをしばしば経験する。臨地実習では、その時々で変わる患者や看護スタッフ等人間関係形成のための努力に傾注しつつ実習課題の学習を同時進行させる非常な緊張状態の中で学習が進行していく。このような中で、実習を指導する教師は、学習者の内面で何が起きているかに注目することが重要といわれるが、無口となり反応の鈍い学生をどのように導いたら良いか実習教育の大きな課題となっている。

これまでの研究において、臨地実習時の学生の認識に焦点を当てた研究は、集団の特徴や傾向を把握する質問紙調査や困った場面を振り返るプロセスレコードを用いた研究、学生の実習に対する意見や体験のゆらぎについて質的に面接調査をした研究などが存在する。しかしながら整理されない感情や言語化が難しい状態の学習者の心理学的確に描き出し、そのような対象を指導する際の教員の認知・感情を踏まえた相互作用として考察し、指導の在り方を追及した研究は見当たらない。

2. 研究の目的

本研究では、臨地実習で学習が停滞し出口が見えない状況に陥っている学生に対する指導の在り方について、一次調査で学生および指導する教師がおかれている現状を把握し、二次調査でそれぞれの認識について浮き彫りにすることから、実習指導上の示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 全国質問紙調査 (一次調査)

無作為抽出で全国の半数の看護師養成機関に対し、1校につき3年次学生3名、教員3名を対象として自記式郵送調査を実施した。内容は、臨地実習において学習が停滞した経験の有無と回数、その要因と教師に望むこと、自分が考えたことを、教師に対しては、学習が停滞した学生指導の経験の有無と頻度、指導困難を感じたことの有無と経験内容、学生が学習困難に陥る要因、学生に望むこと、指導に際し考えたことなどについて尋ねた。平成26年11月～12月に調査した。

(2) 個別インタビュー調査 (二次調査)

教師は、実習での学習の停滞により指導困難を感じた時、学生は学習が停滞して前に進めない状態の時のそれぞれの認知・感情・行動傾向性について、PAC分析(Personal Attitude Construct Analysis: 個人別態度構造分析)の手法でインタビュー調査を実施した。平成28年1月～10月に実施した。調査期間:平成27年12月～平成28年10月

(3) 用語の定義

学習の停滞

臨地実習において、患者との関係傾性が上手くいかない、看護の方向性が見えない、記録が書けないなどの理由により、数日間あるいはそれ以上学習が進まないで出口が見えないでいる状況

指導困難

臨地実習で学習が停滞し、出口が見えない状態にある学生に対して、その問題や解決方法が見えないなどにより、指導が難しいと感じる状態

(4) 倫理的配慮

本研究は、北里大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。二次調査においては、特に対象者の心理的負担やプライバシーの保護に留意して実施した。

4. 研究成果

(1) 臨地実習における学習の停滞と教師の指導困難状況の実態

全国315校に調査紙を送付し、教師312名(33.0%)、学生251名(26.6%)から回答を得た。教師の平均年齢は44.6歳(SD7.40)、教育経験の平均は9.2年(SD6.67)、学生は3年次生で平均年齢22.5歳(SD4.46)であった。

学習停滞経験・指導困難経験とその要因
学習停滞経験ありと回答した学生は61.0%、学習停滞経験回数は、2～3回が43.4%と最も多かった。次に1回の者が28.3%であった。

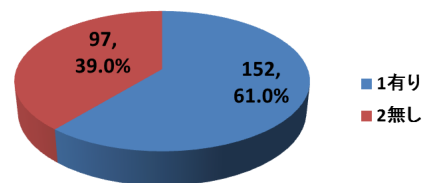


図1 学習停滞経験の有無 (学生)

教師で指導困難経験があると回答した者は、292名で93.9%を占めていた。経験回数は、1～5回程度が45.8%、6～10回程度が19.6%と続いていた。

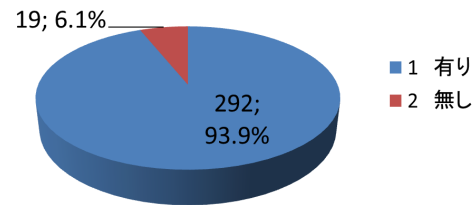


図2 指導困難経験の有無 (教師)

学生が学習停滞となる要因については、図3のように学生と教師の認識にずれがあった。教師は学習意欲や学生の理解力、コミュニケーション力、学力などの能力不足と認識していたが、学習量、表現力、学習意欲、教師との関係づくりにおいて学生との認識の隔た

りがあった。

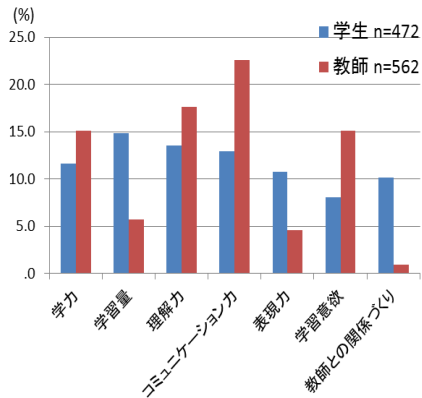


図3 学習停滞の要因(学生・教師の認識)

学生が何に躓いているかを話してくれるかの問いについては、「話してくれるが上手く表現できない」「適切に話せる時とそうでない時がある」「黙ってしまいがち」「教師とコンタクトをとりたがらない」の順で続き、「適切に話してくれる」と回答した者は3.6%であった。学生が教師に話せない理由は、「どう話して良いかわからない」「何が問題なのかよくわからない」が多かった。

これらの結果より、学生の半数以上が学習の停滞経験があり、殆どの教師が指導困難経験を有していたことから、学生の学習停滞とその指導は、実習教育上の現実的課題であると考えられた。また、学習停滞の要因の認識や躓いていることの表現に対する認識についても認識のずれがあった。学習停滞時の学生の心理や置かれた状況をより精査し、探求することが指導困難に至らないために重要であると考えられた。

(2) 臨地実習で学習困難な学生と指導困難を感じる教師が互いに対し望むこと

学生は学習停滞時に教師に何を望むか、教師は指導困難を感じた時学生に何を望むかについて自由記述で尋ねテキストマイニング法で分析した。

データは、記述の中から問いに対し表現していると思われる内容を抽出し、解析にはText Mining Studio v5.0 を用いて特徴表現を抽出した。

学習困難時学生が教師に望むこと

<特徴表現で多かった内容>

- ・学生の話聞いてほしい(決めつけないで、否定しないで、よく聞く、親身になって、最後までetc...)
- ・一緒に考えてほしい(何が問題か、解決策を、看護の方向性を、学生としてできることをetc...)
- ・アドバイスがほしい(自分の考えを聞いた上で、責めずに導いてくれる、ヒントになるetc...)
- ・指導がほしい(具体的な、自信を付けられ

る、話を聞いた上でetc...)

- ・声をかけてほしい(先生から、気づいて、気にしてetc...)
- ・先生の意見を(押し付けない、一方的に言わないで)

指導困難時教師が学生に望むこと

<特徴表現で多かった内容>

- ・素直に話してほしい(本当の思いを、隠さずに、自分の考えを、困っていることをetc...)
- ・自分で考えて(行動してほしい、表現してほしい、etc...)
- ・言葉で表現してほしい(具体的に、「はい」でなくetc...)
- ・学生の対応が難しい(発達障害、パーソナリティに問題、自己学習しない、患者の所に行こうとしない、教師を避けるetc...)
- ・記録を書いてほしい(努力する、とにかく書くetc...)
- ・指導で言うことを聞いてほしい(受容する、聞く姿勢etc...)

これらから、学生は話を聞いてほしい、一緒に考えてほしいと望む記述が多く、学生は、教師には自分が何に滞っているのか、よく話を聞いてわかった上で一緒に考えて解決の方向を探ってくれる指導の在り方を望んでいると考えられた。一方、教師は、素直に話してほしい、自分で考えること、自分を見つめること、指導を聞く姿勢を求めるなどの記述が多かった。教師は、自ら学習を進めようと努力すること、どこに躓いているかを表現してほしい、教師の指導を聞く姿勢などを求めている。学習困難な状況下では、素直になれない、言葉で表現できない、自分で考えられない学生が存在し、結果的に指導困難を招いていると推察された。

(3) 個人別態度構造

看護専門学校または看護大学の学生(3年生)と専任教員に対し、PAC分析(Personal Attitude Construct Analysis: 個人別態度構造分析)の方法を用いてインタビュー調査を行った。その方法は、学生に対しては「学習が停滞し学習を進めることが難しいと感じている状況をイメージし、その時何を感ずよう行動しようと思ったか、また教師に何を望んだか」を問い、教師には「学生の学習が停滞し指導することが難しいと感じている状況をイメージし、その時何を感ずよう行動しようと思ったか」の問いを発し、連想項目どうして遠いことが近いことを評定させ、相対距離行列によるクラスター分析を行う。次に各クラスターを詳細に尋ね、対象者が内面探索をしながら内容を鮮明にする過程を経て、総合的に解釈した。

学生の個人別態度構造

専門学校の学生6例を調査した。これらの学生は、研究の説明に対し自発的に研究参加の意思を示した対象であった。

学生は、「患者とかかわるのが怖くて辛い」「患者とのコミュニケーションが取れない」「患者の役に立ちたいがどうしてよいかわからない」「逃げたいが逃げてはいけないと思いきしい」「自信がなく先行きが不安」「何とかしたい思いと焦り」など感じて悩んでいた。しかしそれを打開しようとするとなると「遅れを取り戻すべく頑張る」というように頑張るという言葉は見られるものの、何をどう頑張るかということについて表現されることはなかった。むしろ「苦しい」「怖い」「逃げたい」「情けない」「どうしてこんなにできないんだろう」「看護師に向いてないのか」「自分に甘い」「何についてわからないんだろう」「学校を辞めたい」など辛い気持ちや自分を肯定的に見ることのできない表現が多かった。学生は、学習が停滞して出口が見えないでいる状況下では、課題に取り組むに際し、どうしたら良いか見えないことに加えて、辛い感情や葛藤が影響し、素直に前向きに取り組めないでいる状況が伺えた。

その状況を打開するため、教師や臨床指導者の力を借りることに対して「ヒントをもらいたい」「一緒に患者の所に行ってほしい」「間違っているところを具体的に教えてほしい」「何について悩んでいるのか考えてほしい」と助けてくれることを望んでいたが、「質問するのが怖い」「学生にも患者のように優しくしてほしい」「追い込むような言動はやめてほしい」「偏見のない指導をしてほしい」「自分の言ったことに責任をもってもらいたい」「感情的にならないでほしい」など、教師に素直に頼れない感情や不安・不信が存在し一歩前に進めないでいた。

教師の個人別態度構造

大学教員3例、専門学校教員4例の教師を調査した。いずれも自発的に参加し、実習教育に関心を持ちより良い指導をと願う対象であった。そのため、「学生が躓いている理由を知りたい」「看護を掴ませたい」「合格レベルの設定と達成をどうするか」「自分ができることは何か」などと悩んでいた。一方、「一緒に関係性を築く」「学生の考えや思いを受け止める」「外側から俯瞰的に見ると見えてくる」「臨床指導者と指導の調整をする」「教師の看護観を一緒にやりながら見せる」など指導が難しいと感じながらも、学生を受け止め、問題解決をはかり学生と共に看護をする中で学ばせようと対応をしている教師もいた。

教師Aは学生に真摯に向き合い、やってよかったと思える実習にしたいと一生懸命であったが、そのことが実習を上手く進められない学生にとって、質問に答えられずに責められているように感じて反応できず、学生が引いていってしまうようでAはますます焦りを感じるようになっていた。教師Bは社会人学生や教師の言動を逆手に取る学生の反応に特に難しさを感じ、響かない学生にどうア

プローチして良いか悩んでいたが、探索の過程で、自分の思いが強く、学生の重荷になっているような気がしてきたと語った。

この例のように指導の方法を見いださずに悩んでいる教師の事例から、教師が良かれと思いき一生懸命になることは、混乱している学生を更に追い詰め、逆効果となることがあるという点、それには学生の心理的な防衛機制が影響していると考えられること、その時の力動関係が混乱している時は、巻き込まれが生じていて、客観的に見えなくなりがちであることが考えられた。これらに対する指導方法は、渦中の中に巻き込まれず、学生を受け止め、問題解決をはかり学生と共に看護をする中で学ばせようと対応をしている教師の対応方法から学ぶことであると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計4件)

堀良子、看護学臨地実習で学習の停滞を経験した学生と学生の指導に困難を感じる教師のPAC分析、平成28年9月、日本応用心理学会第83回大会、札幌市立大学(北海道札幌市)

堀良子、臨地実習で学習が停滞し学習を進めることが難しい学生と指導困難を感じる教師が互いに望むこと、平成27年8月、日本看護研究学会、第41回学術集会、広島国際会議場(広島県広島市)

堀良子、臨地実習における学習の停滞と教師の指導困難状況の実態 学生と教師の認識、平成27年8月、日本看護学教育学会第25回学術集会、アスティとくしま(徳島県徳島市)

堀良子、看護学実習で学習が停滞する時に学生が望む指導、平成27年3月、第25回日本医学看護学教育学会、島根県立大学(島根県出雲市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 良子 (HORI, Ryoko)
北里大学・看護学部・教授
研究者番号：70199529

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()

